

2.2.2 Quirk *et al.* (1985)、安井ほか (1976) があげるリストの問題点

以下、具体的に Quirk *et al.* (1985)、安井ほか (1976) があげるリストの問題点をいくつか具体的にあげておく。文の容認度の調査は困難な問題がいくつもあるが、本稿でとった基本的な調査方法は、LOB, Brown, London-Lund の基本的なコーパスの他に WT 1989, 1990, 1991; LA 1993, 1994, 1995などの新聞の CD-ROM 版、OED²、BOE、BNC などのさまざまなコーパスを利用し検索をした。次に、英米の辞書・文法書を調べ、最後に The LINGUIST LIST を通じて native speakers の言語学者の反応を見るというものである。以下で The LINGUIST LIST を通じての調査の反応を求めた文の文頭にあげた数字、たとえば 7-4-6 は、返事を得た言語学者のうち、この文が容認できるとする人が 7 人、容認できるともできないとも言えないとする人が 4 人、容認できないとする人が 6 人あったという意味である。それぞれの文について、文脈によるといった返事やこのような調査の意義を問う反応もあったが、できるだけコメントも本稿の読者に分かりやすいようにつけ加えることにする。

以下では、一般性のある Quirk *et al.* (1985) が *hesitant*-type としているものと、安井ほか (1976) が *furious*-type とするものをあげる。

2.2.2.1 *hesitant*-type

Quirk *et al.* (1985:1228) に、

(5) Bob is *hesitant* to agree with you.

を典型とする *hesitant*-type の形容詞がある。リストをあげる: able, anxious, apt, certain, curious, due, eager, eligible, fit, free, greedy, hesitant, importune, keen, liable, likely, loath, powerless, prone, ready, reluctant, sure, unable, welcome, willing, worthy; determined, disposed, fated, inclined, poised, prepared, (all) set, unqualified.

これらの形容詞群は「意志」(volition) あるいは能力 (ability) ・可能性 (possibility) ・義務 (liability) などの「法的」(modal) な意味をもつ

とされる。文主語が不定詞の行為を行う上での主語の心的態度や、第三者の判断を述べているということである。すなわち、文主語と不定詞の行為は行為者と行為の関係にあることになる。ただしこれらのうち fit, free, ready は文主語が不定詞の意味上の目的語になることが可能で、(6a) と (6b) は同義であるという注意書きがある。

(6) a. They are not *fit* to eat.

b. They are not *fit* to be eaten.

ところが、free と ready は、fit と同じような性質はもっていない。free は (7a) のように、文主語が不定詞の意味上の主語になっている場合は容認されるが、不定詞が受動形になった (7b) は容認されない。ready を使った (8a) と (8b) とは意味が違う。²⁾ (8a) は「彼らは食べる用意ができていいる」の意味で they は食べる主体であり、(8b) は「その食べ物はもう食べることができる」の意味で、主語は食物である。

(7) a. They are *free* to choose (whatever they want).

b. *They are *free* to be chosen.

(8) a. They are *ready* to eat.

b. They are *ready* to be eaten.

このように *hesitant*-type に分類された形容詞は統語的にも意味的にも性質が一樣ではないので、この *hesitant*-type の形容詞とは一体どんなものか大変理解しにくい。

worthy がこのリストに入っているが、

(9) a. *John is *worthy* to praise them.

b. ?John is *worthy* to be praised.

のように、文主語と不定詞の関係が行為者と行為の関係になると容認度は低い。worthy が人主語 + worthy to do のパターンをとるのは、主語が何かをされる価値があるという関係が成り立っている場合であり、不定詞が主語の主体的な行為を表す場合は容認度は低い。インフォーマント調査では、

(10) 7-7-3 John was *worthy* to be praised by all of them.

のような結果である。(10)よりは、

(11) John is *worthy* of praise by all of them.

2) したがって、Quirk *et al.* (1985 : 1229) の言うように、The lamb is *ready* to eat. であれば「ラムはもう食べ頃だ」の意味にも解釈できるし、「その子羊は餌を食べる用意ができていいる」の意味にも解釈できる。